

こども教育宝仙大学 研究室だより 第10回

「歌の奥深さに触れて」

私が歌の素晴らしさ、奥深さに開眼したのは大学時代でした。それまでは吹奏楽部でチューバを吹き、「音」に熱中して音楽を楽しんでいましたが、歌には音だけでなく「言葉（詩）」があります。「音に対する感動が全てではなく、そこに言葉（詩）への共感、感動を重ね合わせて表現できる音楽が「歌」なんだ」と気付いてから、私はすっかり声楽の勉強に夢中になりました。そして、それがそのまま今に至っています。

声楽表現において発声法はもちろん重要ですが、それは「ただ大きい声や高い声が出せれば良い、正しい音程で歌えれば良い」ということではありません。声にはその人の個性、もっと言えば、人間性がにじみ出ます。声楽表現において最も重要なことは、その学びを通して自らが人として成長していくことにあると私は考えています。

歌は、歌詞とメロディーさえ覚えれば歌えます。しかし、作詞家や作曲家の気持ちになってじっくりその作品を見つめ直すと、そこに込められた作り手の思いや、すぐには気付くことのなかった深い魅力が、あぶり出しのように浮かび上がってきます。そうなれば、歌う楽しさも倍増です。私は楽曲分析という手法を通して、様々な歌の作品研究を行っています。特に、子どもの歌については歌詞の中にあるオノマトペ（どんどん、きらきら等の擬音語・擬態語）の表現に興味を持って研究しています。

（葛西健治 研究分野：声楽表現、歌曲作品研究（子どもの歌を含む）、アウトリーチ）

